

## 学位論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 号		
所属	保健学専攻 生涯保健学分野 母子保健領域	氏名	徳武 千足
学位論文題目	<b>Infant Suffocation Incidents Related to Co-Sleeping or Breastfeeding in the Side-Lying Position in Japan</b> (日本における添い寝・添え乳に伴う乳児窒息のインシデント経験頻度と関連要因)		
論文審査担当者	主査 平林 優子 副査 伊澤 淳、金井 誠		
(学位論文審査の結果の要旨) <b>【背景・目的】</b> 日本では古来より乳児と母親との添い寝や添え乳が一般的であり、母親と乳児は顔を見合わせて寝る姿勢が多かったが、近年、添い寝や添え乳による乳児窒息が乳児死亡の原因と推測される報告が散見されるようになった。しかし家庭内で起こる添い寝・添え乳に伴う乳児窒息のインシデント経験に関する実態報告は認めていない。そこでインシデントの発生頻度と関連要因の解明を目的に、乳児を育てる母親の添い寝・添え乳に伴う乳児窒息のインシデント経験を調査した。			
<b>【方法】</b> 2011年1月～9月に乳児健診(月齢1ヶ月、4ヶ月、10ヶ月)に来所した1,223人の母親を対象に無記名自記式質問紙で調査した。調査内容は、母親の年齢、経産回数、児の出生体重、栄養方法、母児の睡眠環境、添い寝・添え乳に関する項目の有無(添い寝・添え乳の実施、医療専門職からの指導、母親が注意していること、乳児窒息のインシデント経験)とした。974人からの回答を得て(回収率79.6%)、欠損値のあるデータを除く895人(有効回答率91.9%)を分析対象とした。分析は単純集計、一元配置分散分析、t検定、 $\chi^2$ 検定を行い、有意水準は5%とした。 $\chi^2$ 検定は、月齢別(1ヶ月、4ヶ月、10ヶ月)の3群に有意差があることを確認後、群間の有意確率を算出した。なお、本研究は信州大学医学部医倫理委員会の承認を受けて実施した。本研究における「インシデント経験」とは、家庭内で起こったヒヤリまたはハットした経験で窒息事故までには至らなかった経験と定義した。			
<b>【結果】</b> 母親の平均年齢は全体で31.8歳、全月齢で初産婦は約半数であった。子どもの栄養方法は、母乳栄養が全体で63.7%だった。母児の背景は全て、1ヶ月、4ヶ月、10ヶ月の3群に有意差を認めなかった。 添い寝・添え乳は、どちらも実施しないが全体で15.7%、添い寝のみを行うが28.3%、添え乳を行うが56.0%で、添え乳は添い寝しながら行うので併せて84.3%が添い寝をしていた。医療専門職から具体的な方法や注意に関する指導を受けた母親は、添い寝のみを行う母親が36.3%、添え乳を行う母親が60.1%であった。 添い寝時の乳児窒息のインシデント経験は、全体で10.6%に認めた。月齢別では、1ヶ月12.0%、4ヶ月14.1%で、ともに10ヶ月6.1%よりも有意に高頻度であったが、1ヶ月と4ヶ月では有意差を			

認めなかった。インシデントの具体例は「寝具や周辺の物が子どもの口や鼻を覆っていた」が全体の58.8%を占めた。次に、添え乳時のインシデント経験は全体で13.2%に認めたが、月齢別で有意差は認めなかった。具体例は「子どもよりも先に自分（母親）が眠ってしまった」が全体の59.1%を占めた。

添い寝時の乳児窒息のインシデント経験の関連要因は、子どもの月齢のみが有意に抽出され、1ヶ月、4ヶ月の方が、10ヶ月よりも有意にインシデント経験を多く認めた。添え乳時のインシデント経験の関連要因で有意差を認めた項目はなかった。さらに、添い寝時のインシデント経験は添え乳時にインシデント経験がある母親では45.5%に認め、添え乳時にインシデント経験のない母親6.9%及び添え乳を行わない母親7.9%よりも有意に高頻度であった。

#### 【考察】

本研究では、母親全体の84.3%が添い寝や添え乳を行っていたが、医療専門職からの指導を受けた母親は添い寝のみ群で36.3%、添え乳群で60.1%であった。この実態は、窒息予防に対する指導が行き届いているとは言い難いと考えられる。

添い寝時のインシデント経験は全体の10.6%に認め、月齢1ヶ月、4ヶ月の方が10ヶ月よりも有意に高頻度であったことより、添い寝は母児が密着することで寝具や周りの物で子どもの口鼻腔を覆う危険性を有し、寝返り可能になる時期（平均的には月齢5～6ヶ月）までは自分の体を移動し危険を回避できないという乳児の成長発達との関連が示唆された。乳児期早期に添い寝を行うことは、窒息インシデントのリスクを高め、この中の極一部ではあるが死亡や重大事故に至る可能性がある。従って、添い寝に伴うインシデントの減少が添い寝に伴う窒息死亡事故の減少にもつながる可能性があり、その予防対策は急務である。また、添え乳時は全体の13.2%にインシデント経験を認めた。添え乳は添い寝よりも母親と子どもがさらに密着した体勢となり、乳房などによる口鼻腔閉塞の危険性が増加するとともに、添え乳をしながら母親が眠り込むと危険な状況に気付くのが遅くなることも推察される。

以上、添い寝・添え乳に伴う乳児窒息のインシデント経験の実態を初めて明らかにした。添い寝・添え乳による乳児窒息死を予防するためには、母親に添い寝・添え乳に伴う乳児窒息のインシデント経験の実態や乳児窒息予防の注意喚起を周知することが急務である。

主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。